

事業計画（アクションプラン） 成果報告

チーム名称	地域交流チーム
メンバー	稲野鴻池・郡 伊丹摂陽・浜野 サポートテラス・保田 なかの・小田、森

1. チーム目標

地域交流事業の創出 多世代交流の実現

2. 目標達成に対する課題の要因分析

コロナ禍で、何年も中断していた地域交流事業を実際に復活させることができるのか ①いつ、どこで、誰が誰と、どのように実施するか ②実施時期をどうするか ③実施場所をどこにするか ④地域(対象者)をどこに置くか ⑤いずれかと共催するのかどうするか ⑥開催内容をどうするか ⑦その他 法人事業のPRが十分にできていない状況にある ①事業団内でも各々の事業を知る機会がない ②どう発信すれば福祉事業の理解促進に繋がるのか ③今後の福祉人材確保の道筋をどう作っていくのか

3. 課題解決及び目標達成に向けて実行したこと

目標達成までに解決すべき事項		準備段階 4月～10月	実施段階 11月～12月	評価段階 10月～2月
①業務プロセス	どのような形で地域交流事業を実践するのか。 協力、共済を設けるのか、いつ、どこで開催するのか。	・開催場所の提案と検討 ・協力、共済有無の検討 ・開催時期の検討 ・内容の検討 企画書作成と修正を繰り返す	・西高への協力調整と依頼 ・なかの職員への周知 ・ポスター作製 ・ノベルティ準備 ・必要物品の購入、準備 ・当日スケジュールの作成 ・壁面装飾制作 他	・西高生意見交換会のまとめ ・西高生へのアンケート作成、協力依頼と回収、取りまとめ ・ケアハイツなかの職員へのアンケート実施、回収取りまとめ
②地域の視点・利用者	交流事業の対象者をどこにするか。 誰に楽しんでもらうべきか、世代間交流ができるのか、また、地域に貢献できるか。法人事業を知ってもらうには。	・事業の対象者の検討 ・どの地域、誰との交流を図るかの検討 企画書作成と修正を繰り返す	・西高生徒との打ち合わせ 1回目 顔合わせと主旨説明 2回目 車椅子使用方法実技 ・西高生徒との意見交換会 ・西高生へのアンケート実施 ・地域ボランティアの依頼	・利用者は、生き生きとした表情になり 高校生との交流を何より楽しんでいた。 ・西高生は高齢者とのふれあいは貴重な経験ができたと好評であった。 ・介護現場での実体験を生徒に提供できた。 ・携わった職員からも、利用者の喜ぶ笑顔が良かったと好評を得た。
③学習と成長の視点	メンバーの紹介と理解。 また、メンバー事業を理解し、各々事業の課題を共有する。	・どのような多世代交流を図るかの意見交換、検討 ・高齢者、障がい者事業をとおして何ができるかの検討 ・高齢者、障がい者事業連携の検討	・当日のタイムスケジュール作成と担当者への周知 ・当日のタイムスケジュール作成と現場職員への周知 ・サポートテラス利用者によるノベルティの作成作業 ・ポスター作製による事業参加	・事業団内の事業理解と交流の実践。 多職種同士で情報交換や情報共有を行い、各々の事業を理解し課題を共有することができた。 また、事業への参加の仕方など理解が進んだ。
④財務の視点	事業規模の決定。 支出の決定。	・事業規模の検討 ・必要経費の試算 ・事業内容の検討 など	・ケーキや飲み物、仮装衣裳購入 ノベルティ購入費などを含め 約5万円強の支出。	・おおむね当初の試算どおりの支出となった。 事業規模を鑑みると妥当。

4. 目標達成により得られる効果

『クリスマスイベントをとおした多世代交流』 12/17(火)13:45～15:30 特養ケアハイツなかの利用者、ケアハイツなかの職員と西高生との交流事業を開催。終了後(15:30～16:30)には事業担当者と高校生との意見交換会を開催。 ＜得られる効果＞ ①施設入所者、職員、西高生との世代を超えた交流により利用者から好評を博す。 ②西高生に福祉の仕事の紹介、介護の仕事の紹介、PRを行なうことができた。また介護現場の実際を体験することにつながった。 ③事業団のPRにつなげることができた ④事業団内の高齢事業、障がい事業についてチームメンバー同士が互いの事業について理解を深め、これまで以上に横断的な協力体制を構築することにつながった。

5. 今後の展開等について(プランの持続性、職員等法人に対し引き続き得られる効果)

・中野ぬくもりの郷拠点では、引く続き西高生との交流事業の継続実施を検討。 ・西高学生との交流をとおして福祉の仕事のPRを行ない、福祉職に興味を持つ学生のすそ野を広げる。このことは事業団をPRしていくことと併せ、必ず、今後の福祉人材の確保につながっていくと考える。 ・職員においては、法人内の他事業への理解が一層深まり、事業間連携の意識が芽生えたといえる。

6. 自己評価

法人としての地域交流事業という大きな課題を具現化するためには、ポイントを絞り込むまでに何カ月もの時間を費やした。当初は、今年度の事業転換のポイントであるサポートテラスの移転をPRするためにイベントを講じてはどうかと検討、調整を重ねたが、結果として中野ぬくもりの郷を活用したイベントとした。 多世代交流という意味では、新たな架け橋となる高校生との交流が図れたことに加え、高齢者施設の現場を体験する機会が設けられたことは福祉の仕事、ひいては事業団のPRと、今後、介護業界の裾野を広げることにつなげていけると考察し、今後に期待を寄せたい。結果として、担当の想定以上の効果を得られたと感じている。
